

此の表を一見するものは、何人と雖回鶻字とソグド字との類似程度が、回鶻字とエストラングロ字との類似程度よりも遙かに甚しきものなることを認めざるものあらざるべし、果して然らば、字形の類似を根底として、回鶻文字がシリヤ文字より發せるものとする説は、今日に於ては到底支持し得べからず、若し強いて此の説を支へんとせば、ソグド字を用ゐたるものと回鶻人との間に、直接にも間接にも絶對的に交渉が存在せず、各々全く隔絶の關係に在りしことを證明するか、若しくはソグド字が回鶻字よりも後に發達したるもの、或は回鶻字より發達したるものなることを證明するか、何れかの方法に據らざる可らず、然れども此の如き證明は共に成立すべからざること明らかにして、相互の關係につきては、單に回鶻碑文の記事のみによるも、回鶻の可汗が既に其の漠北時代に於て、ソグド地方を征せしこと、又ソグド文字を使用したる摩尼教徒が、新に回鶻に其の宗教を傳へたりしこと(後述) 等記され、ソグド文字が回鶻文字に先立ちて存せしことは、古きソグド文字と回鶻字とを、パピルスに書ける草體 (cursive) のアラム文字、古碑に見ゆるパルミール文字、ボカラの貨幣の文字等と比較すれば明らかなると共に、ソグド文字がシリヤ文字と共同の原始文字より發したるものにして、前者が後者より發達したるものにあらざること等は、既に一九一一年 Gauthiot 氏が *De l'alphabet sogdien* に於て論述したる所なり。

此の如きを以て、上に擧げたる(一)の理由なるものは全く存立の餘地を失へるものと云はざる可らず、然らば(二)につきては如何と云ふに、碑文の文字の回鶻文字と稱すべきものにあらずして、ソグド文字と見ざる可らざることには前に述べたるが如し、而して漢字の碑文に見ゆる新宗教輸入のことが、ネストル派の基督教に關するものはあらずして、摩尼教の輸入を記したるものなることは *Deveria, Marquart, Pelliot* 氏等の既に論定したる所にして、今